

ISSN 2189-3551

Bulletin
of
Research Center for Integrated Education System

Vol. 3 March 2017



OTEMON GAKUIN

Research Center for Integrated Education System, OTEMON GAKUIN UNIVERSITY
2-1-15, Nishi-Ai, Ibaraki, Osaka, JAPAN

追手門学院大学

一貫連携教育研究所紀要

第3号

2017・3

追手門学院大学
一貫連携教育研究所

追手門学院大学

一貫連携教育研究所紀要

第3号

2017年3月

追手門学院大学 一貫連携教育研究所

はじめに

一貫連携教育研究所長 三川 俊樹

一貫連携教育研究所は、「独立自強・社会有為」の人材育成という追手門学院の教育理念に基づいて、「志の教育」「自校教育」「心の教育」「キャリア教育」「国際教育」及び「一貫連携教育」を機軸とした学院の教育目標の具体化を図り、総合学院としての一貫教育及び学院内外の連携教育を企画・推進し、学院における教育・研究の一層の充実・発展に寄与することを目的に設置された機関です。

一貫連携教育研究所は、2016年4月から追手門学院大学附置の研究所となりましたが、追手門学院は子ども園から大学院までを有する総合学園として、子どもや若者の成長と発達を促すための計画的かつ継続的なカリキュラムやプログラムによる「一貫教育」と、学校教育・家庭教育・地域社会の教育が協力して推進する「連携教育」とが協働する「総合的な教育力」を向上させるための教育を推進しており、子どもや若者がこれからの社会をたくましく生きる力を身につけ、その社会を支える力を育てていくことができるように、学院全体としての教育力を高めるための取り組みを続けています。2015年度からは「心の教育」「キャリア教育」「国際教育」の3分野に研究テーマを設定し、その成果の一部は初等中等教員全体研修会でも発表されています。

ところで、追手門学院の教育目標としても掲げられている「心の教育」については、中央教育審議会への諮問「幼児期からの心の教育の在り方について」（1997年8月4日）に対して、「新しい時代を拓く心を育てるために－次世代を育てる心を失う危機」（1998年6月30日）と題する答申がなされました。その中では、「子どもたちの心をめぐる問題が広範にわたることを踏まえ、社会全体、家庭、地域社会、学校それぞれについてその在り方を見直し、子どもたちのよりよい成長を目指してどのような点に今取り組んでいくべきかということを具体的に提言することとした」という主旨のもとに、「未来に向けてもう一度我々の足元を見直そう」「もう一度家庭を見直そう」「地域社会の力を生かそう」「心を育てる場として学校を見直そう」の4章が設けられています。その具体的な提言の内容には、「『生きる力』を身に付け、新しい時代を切り拓く積極的な心を育てよう」「子どもの個性を大切にし、未来への夢を持たせよう」「異年齢集団の中で子どもたちに豊かで多彩な体験の機会を与えよう／地域の行事や様々な職業に関する体験の機会を広げよう」「幼稚園・保育所の役割を見直そう／小学校以降の学校教育の役割を見直そう」など、キャリア教育の目標とする内容も数多く見られます。

その一方で、追手門学院の教育目標である「キャリア教育」については、中央教育審議会によって「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（2011年1月31日）が答申さ

れ、その中で「キャリア教育」とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」であるとされており、「幼児期の教育から高等教育まで体系的にキャリア教育を進めること」「その中心として、基礎的・汎用的能力を確実に育成するとともに、社会・職業との関連を重視し、実践的・体験的な活動を充実すること」と述べられています。さらに、基礎的・汎用的能力の具体的な内容として、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4能力があげられています。

また、追手門学院の教育目標の「国際教育」については、文部科学省の「初等中等教育における国際教育推進検討会報告－国際社会を生きる人材を育成するために」（2005年8月3日）によれば、国際社会で求められる態度・能力として、すべての子どもたちが、「1. 異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、共生することのできる態度・能力」「2. 自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立」「3. 自らの考えや意見を自ら発信し、行動することのできる態度・能力」を身に付けることができるようにすべきであると述べられ、それらを育成することが国際教育であると提言されています。

「心の教育」「キャリア教育」「国際教育」を学院全体の教育目標として具体化を図ることをめざしてきた追手門学院は、乳児・幼児・児童・生徒・学生・大学院生が学び育つ総合学園として、学ぶことと育つことが、生きることと働くことにつながり、その学びと育ちによって、一人ひとりが他者とかがわり、社会とつながり、さらに世界へと広がっていく「かがわり・つながり・ひろがり」を進める教育を大切にしています。今後とも、心の成長と発達を促す「心の教育」、生きる力を育む「キャリア教育」、世界で活躍する人材を育てる「国際教育」を中心に、追手門学院の「これまで」のすぐれた教育実践をあらためて見直すとともに、「いま・ここ」で日々の教育を見つめ、「これから」の教育の在り方をしっかりと見据えていくことがますます必要となるものと思われます。

一貫連携教育研究所紀要第3号に掲載された論文や資料が、そのための大きな力となることを願っています。

追手門学院大学 一貫連携教育研究所紀要

第3号 (2017年3月)

はじめに	三川 俊樹	
「心の教育」についての考察 －追手門学院小学校の劇指導を通して－ (第1報)	窪田 健二 原田 哲次	1
『今に語りかける内藤一老先生の「世界人教育」』	福田 寛孝	11
「総合学園 追手門学院」のキャリア教育実践にむけて 一貫連携教育研究所での活動報告 (2016年度)	表 弘之	
就職試験における数的処理分野の出題状況と出題意図についての考察	樋口 勝一 仁平 直 福井 就	
追手門学院中学校 文集『緑萌』抄録 －追手門学院中学部茨木学舎の設立と出口敏雄先生－	藤原 栄一	

「心の教育」についての考察 — 追手門学院小学校の劇指導を通して — (第1報)

追手門学院小学校教諭 窪田 健二
一貫連携教育研究所 原田 哲次

1. はじめに — 研究の背景と目的 —

2008(平成20)年に追手門学院創立120周年を迎え、「追手門ビジョン120」¹⁾を策定し、“学院の教育理念「独立自強・社会有為」にもとづく魅力ある私学教育の実現”“教育力の向上、教員の意識改革”“学院財政基盤の強化”の3つの基本目標を掲げた。これらの目標を達成するために2009(平成21)年4月1日に「将来計画推進委員会」を設置し具体的な方策の検討を行った。翌年6月に出された「将来計画推進委員会答申」²⁾において、基本目標を達成するための核となる骨子(取り組み)が6つの柱としてまとめられ、その内の一つが「心の教育、キャリア教育、国際理解教育を学院共通の教育目標として具体化を図ること」であった。教育理念を再確認し、心の教育、キャリア教育、国際理解教育及び自校教育を基軸とした学院の教育目標を定め、その実現のための具体的な施策を審議する目的で「学院教育改革検討委員会」が設置された。その答申³⁾において、一貫連携教育研究所を設置し「心の教育」の推進を図ることが謳われ、追手門学院における心の教育の基本的内容が示されている。それは、第16期中央教育審議会答申(1998年6月30日)⁴⁾に示されている「生きる力」の趣旨に沿って、心の教育を道徳教育のみに限定することなく、幅広くとらえて取り組むというもので、心の教育が本学院の教育理念“独立自強・社会有為”を具現化する人材の育成の基本であることが示されている。

本学の追手門学院小学校における劇指導は戦前から引き継がれており、この劇指導を通して児童のコミュニケーション力の育成のみならず様々な教育効果があることが報告されている⁵⁾。これは、本学院の教育理念を具現化する人材を育成する教育実践といえる。

劇指導を通して得られる教育効果に関する教育実践報告はいくつか見受けられるが、劇指導のどのような部分がそうした教育効果を生むのかといった点で掘り下げた報告は見当たらない。

こうしたことから、今回、追手門学院小学校文化祭の劇に取り組んだ児童の作文を分析することにより、児童の心の変化や行動を明らかにして、その中から心の成長を読み取ることを試みた。

2. 劇指導の実際

(1) 追手門学院小学校の劇指導の歴史

追手門小学校における劇指導の歴史は古い。まず文化祭の記載が初めて出てくるのは、大正4年11月に発刊された大阪偕行社附属小学校学報⁶⁾である。当時は学芸練習会と呼ばれ、毎年11月に行われていた。この学芸練習会は片桐武一郎校長先生が始められた行事である。今の文化祭とは大きく違い、研究発表や、合唱、朗読、絵画や工作の展示などが行われていた。この学報には劇という記載はなく、大正4年時点で劇発表があったのかは不明である。さらに資料を読み解いていくと、創立百周年に卒業生記念文集として発刊された山桜にヒントがある。昭和7年卒業生の文集の中に次のような文がある。「学芸会は寸劇、朗読、独唱、童話等があり、これらに出演する者以外はクラスごとに全員合唱にでることになっていた。」このことから、昭和7年までに寸劇、ようするに劇が行われていたことがわかった。おそらくそれよりも前から始められていたと推察され、おおよそ100年の歴史があるものと思われる。

(2) 劇指導について ―担任の劇指導力を支える―

追手門学院小学校では毎年11月下旬に2日間文化祭が実施される。PTAの協賛事業と児童の研究発表、そして、110記念ホールでは、第一日目に音楽発表やクラブ発表があり、第二日目に劇発表が行われる。2・4・5年生が各クラスで劇に取り組む。演じる時間は2年生が20分、4年生が25分、5年生が30分である。演出・監督は学級担任が1で行う。ティーチングアシスタント(TA)の教員が照明・音響を担当し、本格的な設備の中で演技が行われる。

実際の演劇指導は、体育大会が終わった後からおおよそ1か月という期間の中で限られた練習時間で学級担任の演出で指導が行われる。本番は本格的なホールで一切マイクを使わず、保護者や学校関係者など大勢の観客の前で発表を行う。衣装は保護者の手作りで、非常に協力的に裏方を支えていただいております。また、自身の子どものクラス以外の劇を鑑賞する保護者も多く居られることから、劇への関心と期待が大きいことが分かる。本校の年中行事の大きな催しとして今日まで引き継がれていることは、児童が演じる劇の内容のよさと共に先輩教員の劇指導が優れていたことを物語っている。

このように、本校の劇は保護者が自身の子どもの成長を実感し感動し、劇という行事を通して、子どもの成長を促すためのものとしての位置づけが大きい。

担任は、劇の脚本選びから劇指導まで一手に引き受ける。担任の教員経験年数に関係なく、1年目の新任であっても劇発表の学年の担任を受け持つと演出を担当しなければならない。経験のある教員から劇指導について助言はもらえるが、直接指導に関わってもらうことは少なく、児童を指導するのはあくまでも担任である。そこで、経験の浅い教員の指導力の向上を図るために、先輩教員

から後輩教員へ個々での伝授はもちろんだが、全体の場での指導として、①職員劇、②劇練習見学、③校内講演会などが行われている。

一つ目の職員劇は、毎年若手中心の有志の教員が文化祭第一日目に上演している。文化祭が近づくと、毎日放課後に練習を行う。児童はこの職員劇を観ることをとても楽しみにしており、児童達で記念ホールは埋め尽くされる。また、その完成度の高い劇を一目見ようと保護者も多く詰めかける。この職員劇で実際に役を演じることで、児童を指導する祭の様々なヒントを得る機会、すなわち劇指導の研修の場となっているのである。実は、職員劇の主役は毎年新任の教員がすることが暗黙の了解となっている。職員劇参加者の一番年齢の高い教師が監督となり演技指導も行う。新任教員は主役を演じているので、その指導を受ける時間も必然的に長くなる。新任の教員は自身で先輩方から長い時間をかけて指導を受けることで、自然と劇の指導方法も身についていくのである。

二つ目に劇練習の見学である。劇練習中に、劇指導のない教員は、劇の練習をしているクラスを見学しにいくよう、予定が組まれているのである。もちろんそのクラスの劇の出来具合をチェックすることも一つの要素だが、重要な要素は、この見学スケジュールは経験の長い教員は経験の浅い教員の劇練習を見学し、逆に若手教員は先輩教員の劇練習が見学できるように組まれている。そこで、若手が練習を観に行くことで実際に先輩の指導を見ることができ、若手が劇演出をする場合は、先輩教師から指導について助言をもらえ、稀に児童へ直接指導し、劇のレベルを高めることもある。

そして、最後に校内講演会である。本校でも劇指導が得意な教員と苦手な教員がいる。そこで、毎年ではないが、劇指導が得意な教員が講師となって、劇指導に関する校内講演会を実施している。このように、新任でも様々な場面で劇指導についてステップアップすることができるようになっていく。

(3) 児童の様子

本校の児童は、幼稚園でも行事の中で劇を経験している児童が多く、劇が好きな児童が多い。文化祭前になると、どんな劇をするのか気になるのか、劇について話す児童も増えてくる。劇練習を通して、お互いのコミュニケーションが多くなり、結果としてクラス全体がまとまる。以前から、劇が成功するとその後の学級経営がともしやすくなると言われるほどである。また、人前で発表に自信がなかった児童が自信をもつことがある。このように、劇指導を通して子どもたちに心理的・行動的に変化があることは強く感じてきた。ただ、これはあくまで著者の一意見だったので、他の先生方はどう感じているのかアンケートをとることにした。次が、そのアンケートの実施内容と結果である。

(4) 子どもの様子についてのアンケートの実施と結果

○アンケートについて

・先生方に劇を通して気付いた子どもの様子についてのアンケートを実施した。アンケート項目の

内容は表1に示した。また、アンケート結果は表2の通りである。

このように、劇を通して大きな変化があり、特に学級経営に対して有効であることがよく分かった。しかし、今回のアンケートではクラスのどの程度の人数が積極的になったのかははっきりしない。その点をもっと詳しく調べる必要がある。また、発表力という点において、他の教科や学校生活では活かしていないと感じている先生方もいる。

表1 教員対象アンケート

(1) 劇練習中に、児童同志でのコミュニケーション(演技に対する話し合いなど)はありましたか。 ()よくあった ()たまにあった ()あまりなかった ()全くなかった
(2) 劇練習中に、児童自らが積極的に問題を解決しようとした場面はありましたか。 ()よくあった ()たまにあった ()あまりなかった ()全くなかった
(3) 劇の練習、発表を通して、児童の心理的・行動的变化を感じたことがありますか。 ()とても感じた ()感じた ()あまり感じない ()全く感じない
(4) 他の教科や普段の学校生活でも、児童の変化を感じたことはありますか。 ()とても感じた ()感じた ()あまり感じない ()全く感じない
(5) ご意見ご感想がございましたらお書きください。参考とさせていただきます。

※(2)(3)(4)については、それぞれ具体的にどのような場面・変化だったのかを記入する欄を設けた。

表2 アンケート結果

(1) 劇練習中に、児童同志でのコミュニケーション（演技に対する話し合いなど）はありましたか。		
よくあった	78%	
たまにあった	22%	
あまりなかった	0%	
全くなかった	0%	
(2) 劇練習中に、児童自らが積極的に問題を解決しようとした場面はありましたか。		
具体的場面		
よくあった	43%	・立ち位置からの動きの工夫 ・グループで演技の話し合い ・セリフのない時の演技 ・友人の演技について助言 ・自分たちの演技を映像で確認し、改善点を見出す
たまにあった	52%	
あまりなかった	4%	
全くなかった	0%	
(3) 劇の練習、発表を通して、児童の心理的・行動的変化を感じたことがありますか。		
具体的変化の内容		
とても感じた	43%	・全体に迷惑をかけないように、行動できるようになった ・男女が仲良くなった ・友人関係が広がった ・指示を聞けるようになった ・自信をつけ、積極的になった ・声が大きくなった ・普段の行動や表情と違う面が出た ・集中力がつく
感じた	57%	
あまり感じない	0%	
全く感じない	0%	
(4) 他の教科や普段の学校生活でも、児童の変化を感じたことはありますか。		
具体的変化の内容		
とても感じた	26%	・国語で音読の力がついた ・授業の発表に自信がついた ・クラス全体が落ち着いた ・クラス全体が仲良くなった ・積極性が増した ・教師についてくる児童が増えた ・グループ活動が活発になった
感じた	43%	
あまり感じない	26%	
全く感じない	5%	

(自由記述)

- ・劇は学級経営上も学習内容や教育的意義にも大変優れた生きた教材である。
- ・舞台創りは子ども達が主役であり、主体性や協調性の伸長に及ぼす好影響を大切にしていけるべきである。
- ・学級が一つの目的に向かってつき進める良い機会であり、担任と児童との距離も縮まる効果もある。
- ・良い劇をすると子どもが伸び、保護者も子どもをほめることで、さらに伸びる。また、保護者は先生を信頼するようになり、学級経営上プラスになる。
- ・今の子ども達の弱さが最近目立つ。声の大きさや、非積極的な面など。成長が感じられないこともある。
- ・苦手な子をどうもっていくか難しい。

れしかったです。悲しそうな顔をするのがとてもむずかしくて、先生に何度も注意をうけました。このことを克服するために、「家で、どういう顔がいいか、鏡を見ながらいろいろ試してみました」とあるように、不安を自ら克服するために努力を重ねている。その結果、「ずいぶんうまくなりました」と自らの努力で困難を乗り越えている。しかし、「みんなと合わせようすると、表情がくずれて笑っているように見えるらしく、何度も注意されました」。努力をして一端はできるようになったかと思われたが、さらに克服しなければいけない課題が前を遮る。そこで、この課題を何とか克服するために悩みいろいろと試案を巡らせる。「そこで心の中をからっぽにして、負けうさぎになりきるようにしてみました。そうしたら練習していくうちに、だんだんできるようになりました。」

このように、劇の練習を通して常に「外からの刺激」すなわち役をうまく演技することが求められ、悩み、不安になり、何とか克服するために努力し、演じ、結果につながる。ほめてもらうことによって、自分で問題を克服したことに自身を持つ。こうしたことを、劇指導の期間ずっと幾度となく繰り返し経験することを通して、困難なことに直面しても自分の力と友達からの応援、親など周囲の人からの支援によって問題を解決していけることを経験する。こうしたことから劇指導によって豊かな心が育まれ教育効果をえることができると考えられる。

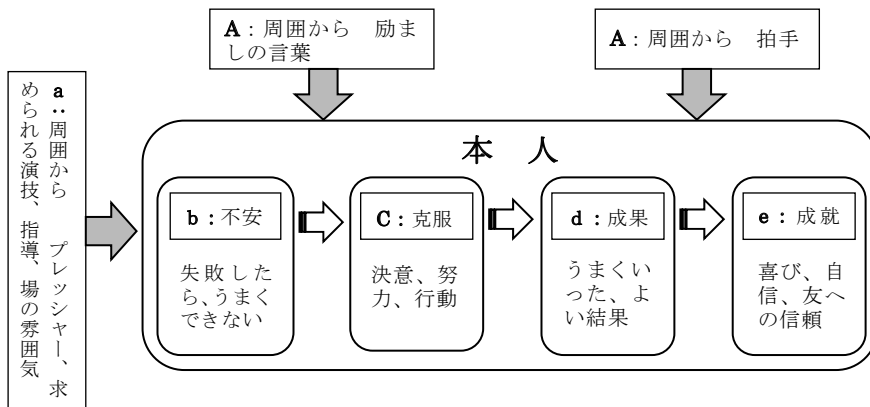


図1 劇指導における、児童とその周囲との関係

表3 児童作文

「負けうさぎ 四年

ぼくは文化祭の時、負けうさぎのげきをしました。このげきは、うさぎとかめの話で、かめに負けとうさぎが仲間はずれにされていたらけれど、おおかみと戦うことでみんな仲間おくりをした話です。配役を決める時から文化祭が終わるまで、とてもいろんな事がありました。

配役を決める時、ぼくは負けうさぎの役を選びましたが、希望者が十人をこえていたので、自信がありませんでした。けれど、希望どおりの負けうさぎの役になれたので、とてもうれしかったです。負けうさぎの役は、ぼくと野口君の二人で、どちらが前半になるか話し合った結果、ぼくは前半をすることにしました。

練習の時、悲しそうな顔をするのがとてもむずかしくて、先生に何度も注意をうけました。そこで、家で、ど

しかし、みんなと合わせようとすると、表情がくずれて笑っているように見えるらしく、何度も注意されました。自分ではちゃんとやっているつもりなので、注意されてもなっとくできませんでした。

「何でだろう。」

と、毎回思っていました。そこで心の中をかたっぽにして、負けうさぎになりきるようにしてみました。そうしたら練習していくうちに、だんだんできるようになりました。ぼくの役は大きな身ぶりをするのがなかったの考えるのはかんたんでしたが、小さな身ぶりで負けうさぎの心を表すのは、思ったよりむずかしかったです。

練習をかさねて予行になりました。予行では少し失敗もありましたが、後は上手にできました。

「失敗したところをなおして本番にむけてがんばるぞ。」

と思いました。

になると、落ち着いてきて、みんなが「がんばれよ。」

とおうえんしてくれました。

その後、いよいよぼくの番がきました。

「ようしがんばるぞ。」

と、思っ出て行きました。いつもとちがってお客さんがたくさんだから、声がよく通るように大きな声をだしました。練習のとき、時々笑ったような表情になってしまつて失敗したので、本番では絶対そうならないように思っていたので、何とか最後までやり終えることができました。

終わるとほつとしました。ほかのみんなもがんばっていたようです。げきが終わるとはく手があったのでとてもうれしかったです。

ぼくは、このげきをやることで、一人であるのはかんたんだけれど、みんなと合わせるのは大変だと改めて思いました。そしてみんなが力を合わせて心を一つに

表 4 児童作文の分析

(1) 配役を決める					
a: 周囲から	b: 不安	c: 克服	d: 喜び		
負けうさぎの役の希望者が10人を超えていた	(選ばれる) 自信がありませんでした	希望どおりの役になれた	とてもうれしかった		
(2) 役作り					
a: 周囲から	b: 不安	a: 周囲から	c: 行動	d: 成果	
悲しそうな顔をする	とてもむずかしい	先生に何度も注意を受けました	家でどういう顔がいいか鏡でいろいろ試した	ずいぶんうまくなった	
(3) セリフ					
c: 行動		d: 成果			
何回か言葉だけで練習した		かなり上手になった			
(4) みんなと合わせる					
a: 周囲から	b: 不安	a: 周囲から	b: 不安	c: 克服	
身ぶりを合わせる	笑ったように見える	何度も注意されました	なっとくできませんでした。何でだろう。	心の中を空っぽにして負けうさぎになりきるようにした	
d: 成果		a: 周囲から	b: 不安		
だんだんできるようになった		小さな身ぶりで負けうさぎの心を表す	むずかしかった		
(5) 予行演習					
b: 不安	d: 成果	c: 克服			
少し失敗もあった	後は上手にできました	本番にむけて頑張るぞ			
(6) 本番					
b: 不安	c: 克服	A: 周囲から	c: 克服	a: 周囲から	c: 克服
とてもきんちょう。ちゃんとできるかな。とても心配	落ち着いてきた	みんなが「がんばれよ。」とおうえんしてくれました。	ようしががんばるぞ	お客さんがたくさん	声がよく通るように大きな声をだしました
b: 不安	c: 克服	d: 成果	d: 成果	A: 周囲から	
練習のとき失敗した	本番ではでっかいぞうならないよう	何とか最後までやり終えることができました。	ほっとしました。	ほかのみんなもがんばった	

4. 今後の方向性

今年一年は、劇指導を通して起きる児童の心の変化や教育効果を児童の作文分析や教員を対象としたアンケートを基に調査・研究してきた。その結果、劇指導を通して児童への教育効果があることが分かった。それが具体的にどのように子ども達を感じているのか詳しく見ていく必要がある。次の一年は大学の心の教育研究所と連携し、子ども達へのアンケートを実施する予定である。そこで、クラスの児童のうち、何人ぐらいが成長を感じているのかなどさらに詳しいデータを取り、さらに深い考察をしていきたい。また、子どもの成長を促すための効果的な劇指導はどのようにすればよいのか検討していく。さらに、それを他の教育場面にまでいかすにはどうすればよいのが今後の研究課題である。

<参考文献>

- 1) 「追手門ビジョン 120」 学校法人追手門学院 2008年9月19日制定
追手門学院教育理念、追手門学院大学・大学院、追手門学院中学校・高等学校、追手門学院大手前中学校・高等学校、追手門学院小学校、追手門学院幼稚園、各学校・園の教育目標、将来計画および学院ビジョン大学ビジョンを記載。
- 2) 「将来計画推進委員会答申書」学校法人追手門学院将来計画推進委員会 2010年6月
「追手門ビジョン 120」の3つの基本目標を具体化するため6つの骨子がまとめられた。
- 3) 「学院教育改革検討委員会答申」学校法人追手門学院学校教育改革検討委員会 2012年3月30日
「国際教育」、「キャリア教育」、「心の教育」、「自校教育」及び「一貫連携教育」に関する具体的な施策が提言された。
- 4) 「第16期中央教育審議会答申」1998年6月30日
「新しい時代を拓く心を育てるために」— 次世代を育てる心を失う危機 — (中央教育審議会「幼児期からの心も教育の在り方について」答申)
- 5) 東田充司(追手門学院小学校)「私の考える劇発表のめあてと、教育的な意義について」
日私小連全国夏期研修会 平成19年度
- 6) 大正4年11月に発刊された大阪偕行社附属小学校学報
- 7) 文集『みんなの追手門』1987年発行 第29号 p48-p49

就職試験における数的処理分野の出題状況と 出題意図についての考察

本学基盤教育機構教授 樋口 勝一
神戸国際大学附属高等学校 仁平 直
大手前学園 福井 就

1. 研究動機

民間企業の就職適性試験における数学関連内容（以下、「数的分野等」と呼ぶ）の出題割合は高い（表1）。例えば、リクルート社が提供して多くの企業に採用されているSPI3試験の学力検査のうちの50%がこの分野で占められている。その他、日本SHL社提供の玉手箱、GABなどの適性試験も同じ傾向にある。また、公務員試験においても、基礎能力試験の知識分野として英語、国語、社会、理科などの他分野とほぼ同じ割合で出題されるほかに、知能分野として「数的推理」、「空間把握」、「判断推理」、「資料解釈」というように数的分野等の問題が別枠で課されていて、数的分野等の能力が採用試験において重視されていることがわかる（表2）。もちろん、教員採用試験の一般教養においても算数・数学が比較的多く出題されている（表2）。

これまで、上記のような出題傾向を大まかに述べている参考書は見受けられる[1]が、定量的に調査した研究例は未だ存在しない。また、その出題意義についても河崎ら[2]が簡単に言及しているのみで見当たらなかった。

そこで、本研究では、就職適性試験や公務員・教員採用試験の出題傾向を調査し、その出題意義について考察する。

本論文の構成は以下のようである。第2章で出題傾向調査方法とその結果と考察を示す。第3章では、第2章の調査に基づいて、小学校・中学校・高等学校の各学習指導要領と経済産業省の提唱する社会人基礎力を手掛かりにその出題意義を考察する。第4章では、初等中等教育では直接的には学習しない内容であるが、SPIと公務員で重視される「判断推理」分野について考える。第5章はまとめとする。

表 1. 主な就職筆記試験内容 (適性試験)

制作会社	名 称	内 容	
リクルート	SPI3 テストセンター	言語 (文章理解・文法)	
		非言語	数的推理
			空間把握
			資料解釈
日本 SHL	GAB GFT 玉手箱	言語 (文章理解・文法)	
		非言語	数的処理
			資料解釈

表 2. 主な公務員試験と教員採用試験における筆記試験概要

採用試験	適性試験	一般教養	その他
公 務 員	数的推理	英数国理社など	法律 経済 専門など
	空間把握		
	資料解釈		
	判断推理		
教 員	×	公務員試験とほぼ同様	教職教養 専門教養
教員大阪	<u>公務員試験とほぼ同様</u>	×	上に同じ

2. 出題傾向の調査 [3]

2-1. 調査方法

数的分野等の出題割合、その中の分野別出題割合、さらには学習指導要領における学校種別・学年別出題割合の全数調査をおこなった。調査対象を、SPI3の本試験問題は公表されていないことから2014年10月現在最新で出版確認しうるすべてのSPI3受験参考書の模擬試験問題[4]とした。国家公務員試験については2012-2013年実施分の基礎能力試験過去問[5]を、教員採用試験については2013年に実施されたすべての地方自治体の過去問[6]を調査対象とした。

2-2. 各採用試験における数的分野出題概要

各試験における数的分野等の出題割合は、SPI3で50%、国家公務員試験で35%、教員採用試験では15%であった。どの試験においても数的分野等の出題率が高い。特に、SPI3と国家公務員試験における出題で多くをこの分野が占めている。このことから、数的分野等の出題が就職試験等で重視されているという一般的な感覚がSPI3と公務員試験では正しいことが定量的に示された。そ

の一方で、教員採用試験では、数的分野の出題割合が突出しているわけではないことも確認できた。

また、出題内容の学校種については、SPI3で小学校内容が42%、国家公務員試験で高校以上内容が75%、教員採用試験で中学校内容が50%と、普段指導している難易度の感覚「SPI3<教員採用試験<国家公務員試験（易しい順）」もデータとして示された（表3）。

さらに、出題分野としては、SPI3では図形はほとんど出題されず、他の分野がまんべんなく出題されている。また、国家公務員試験では判断推理と図形で64%、教員採用試験ではすべての分野がまんべんなく出題されていることがわかり、各試験の傾向を読み取ることができた（表4）。

以下、各試験を個別に見ていく。

表3. 学校種別数的関連分野等出題率（%）

	SPI3	公務員	教員
小学校	42	4	21
中学校	13	21	50
高校	18	32	21
それ以外	27	43	8

表4. 分野別出題率（%）

分野	SPI3	公務員	教採
数と計算	12.1	33.1	36.1
数量関係1	26.2	11.1	9.3
数量関係2	21.2	10.3	15.9
量と測定	12.5	5.0	16.5
図形	0.5	31.3	12.5
判断推理	24.5	33.1	7.7
その他	3.0	0.0	2.0

2-3. SPI3の出題傾向

SPI3では42%が小学校内容であった。そのうち6年生内容が小学校内容の80%（全体の34%）とほとんどを占める。小学校では数学ではなく「算数」を学習するのであるが、その違いは学習指導要領[7,8]によると、より「日常の事象に関連」した内容になっていることであろう。6年生の内容が出題の中心である理由としては、それが小学校算数の集大成となっており、この学年の内容の習熟度を確認することで、ほぼ小学校算数すべての習熟度を確認できるからだと考えられる。また、出題内容については、計算と数量関係が中心で図形は出題されていない。出題の意図としては、1つは、小学校算数の実目的[9]という観点から、「内容そのものの理解」を、つまり、学習指導要領にある「日常の事象の計算力や数量関係の理解」を試されていると考えられる。加えて、

陶冶的目的 [9] という観点から、算数内容を学習したことによって獲得された「人格・価値観・態度」や「思考力・表現力・判断力」を試されているとも考えられる。特に小学校という「人格形成」に大きな影響を与える時期に学習した内容である算数を重視していることは、陶冶的な観点から獲得された能力が求められているのではないか。なお、小学校内容ではないが、「判断推理」分野も 25% も出題されており、算数・数学教育で陶冶的に獲得される力である「思考力・判断力」が求められていることのさらなる裏付けとなっている。なお、「図形」分野の出題がほとんどないのは、「日常の事象」について重視しているからであろう。

2-4. 国家公務員試験

国家公務員試験については 2012 年より新制度がはじまり、従来とは少々異なる出題傾向となった。ただし、数的分野等の出題は従来から一貫して重視されており、新制度に移行してもその方針に変更はなく、一般知識・知能（基礎能力試験 [10]）において 35% もの出題率となっている。ここでは、新制度大卒専門区分に絞って考察していく。まずは、学年別では高校以上が 75% であり、中学内容が 21% と続く。分野別では判断推理と図形が合わせて 64% を占め、計算・数量関係は残りの 36% であり、SPI3 や教員採用試験とは異なる傾向である。また、高校数学内容の出題が 32%、それ以外が 42% であり、それ以外の出題はほとんどが「判断推理」であることから、高校内容と判断推理が 3 分の 2 を占めていることがわかる。高校数学の学習目的は「中学校に比べて体系的に整った基本的な内容」[11] とされており、他の就職試験よりも体系的な数学の理解が求められている。判断推理については、算数・数学学習によって「陶冶的」に養った力が試されていると見ることもできる。

2-5. 教員採用試験

教員採用試験の一般教養では、数的分野等の出題率は 15% と比較的高いものとなっている。ただし、SPI3 や国家公務員試験大卒専門職のように突出した出題率ではない。学年別出題率では、中学校内容が中心で 50% を占めている。内容についてはすべての分野がまんべんなく出題されている。中学校数学は「日常的なものに止まらず、様々な事象を数理的にとらえ、考察し、表現したり処理したりする能力を高めること…」[8] ということで小学校算数の「日常の事象に関連」した内容より抽象的になっている。教員採用試験では日常的な事象よりもむしろ純粋に抽象的な「数学」の知識・技能が試されているのであろう。また、数的分野等（教員採用試験では数学）の出題率は、国語、英語について 3 番目であるため、数的分野等の能力のみが特別に重視されているわけではない。

3. 数的分野等の出題意図

なお、教員採用試験においては、「数的分野等の出題割合は突出していないこと」と、中学校で学習する内容が中心で後述する「陶冶的内容を特別に意識されていないこと」が明らかなので、数的分野等出題重視の議論では除外している。

3-1. 学習指導要領から出題意図を読み取る [12]

小中学校の各教科目標を学習指導要領から読み取ることで、SPI3 と公務員数的分野等の出題割合が高い理由を推定することにした。

一般に数学教育の目的は①陶冶的目的（人間の人格・精神を育てる）、②実目的（日常生活や職業などに必要な知識・技能などの獲得）、③文化的目的（文化の継承・発展）の3つに分類される [7]。他の教科教育についても、これら3つの目的に分類できると仮定して分析を進めた。

各教科目標は学習指導要領解説において、2~5つに分割されていて、その一つひとつの中に①があるかどうか確認した。各校種（小中）における各教科目標の中に①がどの程度含まれているかを表5に示す。

表5. 学習指導要領における陶冶的目的の出現回数と出現割合

	小学校				中学校			
	算数	国語	理科	社会	数学	国語	理科	社会
回数	2	3	1	0	1	1	0	0
割合	2/5	3/7	1/6	0/3	1/4	1/4	0/5	0/3

算数・数学と国語が他教科より、また小学校が中学校よりも陶冶的目的の出現回数・割合ともに多い。なお、小学校学習指導要領解説 算数編には「算数の学習で児童が身に付ける基礎的・基本的な知識及び技能は、国語力と並んで、生活や学習の基盤となるものである。日常の生活においても、他教科等や総合的な学習の時間における学習においても、様々な活動の基になる」と示されていることから、算数と国語が他の教科や活動と比べて、それらの基になる特別な教科であることがわかる。

3-2. 社会人基礎力と学習指導要領

小・中学校の各教科の目標が、社会人基礎力の小項目にある12の力にいくつ対応しているかを調べた（表6）。なお、12の力のすべては数学教育の3つの目的のうち①に相当するものであると考えられる。各教科には2点以上、これらの力の養成が含まれている。算数の目標が①の目的を多く含んでいるため、当然に算数が6点と突出している。

表 6. 12 の社会人基礎力と教科目標の対応数

	小学校				中学校			
	算数	国語	理科	社会	数学	国語	理科	社会
対応数	6	3	4	2	3	3	4	2

4. 判断推理について

判断推理は、SPI3 と公務員試験で出題されている。どちらの試験においてもその出題率が約3割程度と突出している。学校種別分類において「それ以上」とされているのは、ほぼこの分野である。判断推理は初等中等教育で直接的には教授されていないが、論理的に考える内容を多く含むため、中学校での「図形の証明」や高校での「集合・論理式」の分野などで培った力が問題を解くのに利用されていると推定できる。そして、出題意図としては、まさに①の陶冶的目的により培われた力の測定になるだろう。明らかに②や③ではない内容である。

5. 考察

これまでの結果を表7にまとめた。SPI3 と公務員では、数的関連分野等、特に小学校算数または判断推理重視から、①の陶冶的目的によって培われる能力と②によって養成されるさまざまな教科・活動の基になる基本知識・技能を見ていることが推定できる。一方で、教員採用試験では中学全科がまんべんなく出題されていることから、②によって養成される単なる知識・技能を見ているものと推定できる。なお、SPI3 と公務員の出題傾向は①に相当する社会人基礎力とも概ね対応していることも確認できた。

表 7. 各試験の出題傾向・意図のまとめ

	出題傾向	出題意義
SPI3	・算・数+国のみ ・特に小算重視	・陶冶的目的達成を見る ・基本知識・技能を見る
教採	・中学全科均等	・知識・技能確認が中心
公務員	・算・数重視 ・判断推理重視	・陶冶的目的達成を見る ・基本知識・技能を見る

本研究の結論として、SPI3 や公務員といった就職試験における数的関連分野等の出題の意義としては、陶冶的目的によって培われる「人格」の測定と実用目的によって培われる「さまざまな活動の基礎となる知識・技能」の測定の2つがあるとした。なお、前者は昨今の人材採用における「学力ではなく、人を見る」といった流れに合致している。そうすると、SPI3 や公務員は「一見学力

試験であるが、その内容は人を見ている」ということになる。もちろん、「学力よりも人」とはいつでも、採用時においては実際にこういった学力試験を課していることから専門的な力ではなく「さまざまな教科・活動の基になる基本知識・技能」も必要な力として採用の判断材料となっていることも本研究で判明している。

今回、明らかになった内容については、作成者が意識して試験問題を作成しているか、また、採用側が意識してそれらの問題を利用しているかについては定かではないし、確認することも困難である（作成者〔SPI3 はリクルート社、公務員試験は公益財団法人日本人次試験研究センター〕は問題の機密性を考えると出題意図を完全に公開しないことも予測され、また、採用側〔SPI3 は一般企業、公務員試験は国と地方公共団体などの公的機関〕も同様に利用意図を公開しないと考える）。ただ、採用側の一般企業については、利用意図を明らかにしてもらええる可能性もある。SPI3 の利用意図としては、

- ・ 出題意図を推定してその内容を理解している人材が必要と考えているから
- ・ 出題意図や内容は分からないが、試験利用で良い人材が採用できているから
- ・ 何となく他社も利用しているから

などが考えられる。今後、直接的に SPI3 を利用する企業を調査して数的関連分野等の出題意義をさらに探究していく必要があると考えている。

なお、本研究は日本ビジネス実務学会近畿ブロック研究会の 2014-2015 年度研究助成を受けたものである。

参考文献

- [1] SPI ノートの会・津田秀樹（2013）『これが本当の SPI3 だ！ 2015 年度版』洋泉社。
- [2] 河崎美保（他）（2014）「文科系大学生就職支援のための数学教育の必要性」追手門学院大学『教育研究所紀要』第 32 号：p.143-146.
- [3] 樋口勝一（他）（2015）「就職試験における数的処理分野出題状況調査」日本ビジネス実務学会『第 34 回全国大会プログラム・要旨集』：p.60-63.
- [4] 就職対策研究会（2014）『最頻出！ SPI パーフェクト問題集 2016 年度』高橋書店 他
- [5] 資格試験研究会（2014）『国家専門職大卒教養・専門試験過去問 500 2015 年度版』実務教育出版。
- [6] 時事通信出版局（2013）『2015 年度版一般教養の過去問』時事通信社。
- [7] 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説算数編』東洋館出版社，第 2 章：p.18.
- [8] 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説数学編』大日本図書，第 2 章：p.16.
- [9] 中原忠男（2000）『算数・数学教育の目標・目的』日本数学教育学会『日本数学教育学会誌』第 82 巻・第 7・8 号：p.48-51.
- [10] 人事院．国家公務員試験採用情報 NAVI. (<http://www.b-jitsumu.com/study/writing.html>) .2015.4.9 取得.
- [11] 文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領解説数学編理数編』実教出版，第 1 章：p.16.
- [12] 樋口勝一（他）（2016）「就職試験における数的処理分野出題状況調査」日本ビジネス実務学会『第 35 回全国大会プログラム・要旨集』：p.64-66.



追手門学院中学校 文集『緑蔭』抄録 —追手門学院中学部茨木学舎の設立と出口敏雄先生—

初等中等室 藤原 栄一

prologue - 茨木学舎での始動、1期生とともに過ごした三年間の懐古

・・・(略)・・・

昭和42年4月12日、入学式

真ッ白い校舎！ 茨木学舎中学部第一期生！

広く、明かるく、たくましくをモットーに！ 湧き上がる希望、理想に満ち満ちた門出！

けれども、反面、私にとっては重苦しい出発でもありました。・・・

二十名の1年生は、決して最初から茨木学舎を志望したのではなく、大半は強引な勧誘の結果でした。しかも、それを受け入れる校舎には、中学部の存在を示す門標もなく、教室内も教壇・黒板すらまだ整わずといった状態でした。

この生徒達と父兄に満足を与える。この学舎に来て本当によかった、といってもらえるようにする。どうすればよいか？ 茨木学舎中学部の将来にも繋がる問題として、1月以来、私の頭を締め付けていたのです。

1月末、茨木に転属を命じられてから約2ヵ月、謙虚に、本当に謙虚に、親しい先輩、同僚、卒業生の意見を伺い、考えをまとめては来ましたが…。

何よりの力づけは「思う存分やりなさい」との学院長のお言葉、それに中学部（大手前学舎）二期生有志数十名による募金でした。テープレコーダー、書架、辞書類などが相次いで届けられ、そしてこれは山添部長の尽力により、同じく卒業生より教室の絨絨が寄贈されたとき、初めて、何とか踏み出したという感慨を抱くことが出来ました。

・・・・・・(以下、略)・・・・・・

…子どもたちに豊かな体験を、本物の体験を、と申し上げてきました。それは、それらの体験に裏打ちされた知識が本物の知識であり、知恵に発展し得るものだからです。・・・(D)

(退職後、'94.4「四季折々の自然と行事」の一部)

I. 新たな中学校 (茨木学舎) づくり…「めざされた教育」の内容

—『緑萌』第1号—

貧を学ぶ

担任 出口敏雄

学道は先づすべからく貧を学スベシ (正法眼蔵随聞記 五)

禅宗、永平寺教団の開祖道元 (1200～1253) の主著「^{しやうぼうげんぞう}正法眼蔵」は 極めて難解の書、未だ一頁だに読み進むに至りませんが、その弟子^{えいじやう}懷^{ずいもんき}粹の編になる「正法眼蔵随聞記」は、比較的親しみ易く、私の座右の書の一つです。

道を学ぶには、まずぜひとも貧を学ばなければならない。貧を学び、貧に親しんでこそ、はじめて真の道が開かれる。

仏祖ブツダ (釈尊) をはじめとして、多くの有徳の師が、貧に徹した厳しい生活を通して、悟りに到達しています。

それら先師の境地に、私たち凡夫は到底到達し得べくもありませんが、「貧を学ぶ、貧に親しむ。」その精神・生活態度は、私たちの中にも生かして生きたい、否、生かさねばならないと思います。

「貧」。通常の意味は (物質的) 貧窮・貧乏ということですが、それのみでなく、これを拡げて (精神的) 窮極・極限の状態と解したいと思います。

人生、誰も平安を願わざるものはありません。しかしながら、それは許されないことです。波乱万丈と形容されるごとく危機・試煉が待ち設けています。そうして、それを乗り越えることによって、人間は、個人としても、あるいは、人類全体としても大きく生長し進歩してきました。

危機・試煉に当たって、人間がそれを乗り越え得るかどうか？ それは、先ず、その人間に貧の体験に裏付けられた強靱さが存するか否かにあります。

もしなんらかの外的条件が耐乏生活を強いることがあっても、粗衣粗食の体験は、それに耐え得る気構えを与えてくれるでしょうが、美食に慣れた人間には、耐え得るところではありません。

一日断食の経験は 1, 2 回の絶食をさして苦とは感じさせないでしょうが、未経験の人には、その空腹感是我慢のならぬものとなります。

一日 30^{キロ}を踏破した人間にとって、40^{キロ}の行程はさして、逡巡を感じさせないでしょうが、20^{キロ}の経験しか持たない人間にとっては、大きな逡巡を与えます。

私たち、いわゆる戦中派と称される世代は、第二次大戦中、少なくとも物質的な貧の生活の体験者です。その体験を次の世代 (わが子) にはさせまい、これは親として子に対する当然の愛情と思います。しかしながらそのこと、子供を甘やかすこと (これは適切な言葉ではありません。もっと適切な言葉があるはずなのですが、浮かばないのです) とは別です。

彼らが世界的な視野を持った、広くたくましい人間として成長してくれるために、私たちはやは

り、時にぎりぎりの体験を与えねばならないと思います。

合宿の一コマ、遠足、体育会、見学旅行その他、この一年、私なりに貧の生活を生徒たちに与えてきたつもりですが、現在のまだ混沌とした状態から、生徒たちが彼らの進むべき真の道を見出し、してくれるために、来年度はより地味な努力を、家庭とともに重ねていきたいと思っています。

—『緑萌』第2号—

虚 襟 に

二年担任 出口敏雄

虚襟にあらざれば忠言を入れず（正法眼蔵随聞記 一）

「虚」はむなし、「襟」はえり、またはむね、転じてころ（心）、従って意は「虚心—心をむなしくしていなければ、忠言を受け入れることができない。ということになります。胸に一物を抱いて、あるいは、何か先入観を持って聞くと正しい言葉が耳に入らない。入らなければ身につかない。道元はさらに、心のみでなく、世俗の事一切、飢えや寒さも念頭におかず、ひたすら身心を無にして聞くように説いています。

私達身を無にするまでには到らずとも、心を無にして聞くようにはありたいと思います。

ソクラテスが人に尋ねられて「私は少しもえらくない。私が他の人と異なっているとすれば、それは私が自分は無智だということを知っているからだ」と答えた態度も、また、これと等しいものです。

私達は、ともすると、自分はすでに完成されている。自分の考えは正しいとの我執・我見にとらわれがちです。しかしその態度からは進歩はあり得ず、成長は止まってしまいます。

私達は、いついつまでも成長を続けて行きたいものです。

それでは、どのような人が我執・我見にとらわれ易いかと考えて見ますと、偏った幅の狭い知識しかもたない人に多いようです。広い教養・知識を持った人ほど、なお虚心に進歩を求めて行かれるようです。

今、教育（学校および家庭）の場でこのことを思い、私達どのようであらねばならぬかを考えてみますと、先ず私達自身、謙虚にさらにより広くあるべく努力しなければならないと思います。

教師および親達が、なお進歩を求めて努力する姿から、子供達は人間としての在り方を学んでくれるでしょう。

次に子供達に対しては、高度なすばらしいものに接する機会を与え、それにより、自ら自己の未完成、狭さに気づかせ、常により以上の向上を目指して努力する生活態度を身につけさせたいと思います。自分よりはるかに背の高い人と接した時、人ははじめて自分の低さを感じます。すばらしい人に出会った時、身の不肖を覚えます。そうして、その努力は現在では従来より以上に、教師（親）一個人、あるいは教師集団のすべてをぶつけるのみでは不十分です。学校（家庭）という枠から飛

び出して(時には子供達の発達段階を無視しても)より広く、より高いものを見、聞かせねばならないと思います。例をあげればグループ・サウンズに狂喜する子供達をただ非難するのではなく、一流のクラシックの演奏を聞かせるべきでしょう。

幸い本学院の生徒達は経済的には恵まれた家庭の子弟達です。私達はこれを大いに利用させていただき、常に虚心に向上を目指し得る中の広い人間の育成に当たりたいと考えています。

本年度もまた、そのような機会を心掛けて来ました。

主なものをふり返って見ますと、

先ず四月。修学旅行を廃止、これに代る見学旅行を春休み毎に行うことにし、本学年は東海地方へ二泊三日で出かけました。(省)細は生徒の感想文にあります、浜松では日本楽器の感想文にあります、浜松では日本楽器の本社工場を訪ね約二時間、また夜はユースホテルに宿をとり、ホステラーのおばさんの話を聞くといい具合です。越冬つばめ宿の河井さんに話を伺うというような予期せざる機会を得ることが出来ました。

夏、臨海は若狭湾大島の先端の僻村で民宿で行い、水泳訓練に併せて日本の漁村一断面に触れさせ、さらに二年生は八月末、宇治黄檗山潮音精舎で二泊三日の参禅合宿を行いました。きびしい禅寺の修行の一端に触れた体験は、終生忘れ得ぬものとなってくれたと信じております。

また、自らも視野を拓げるために読書を奨励、月一冊課題図書にあたえて、来ました。

その他、社会見学、あるいはいろんな人を招聘してお話を伺うことなども考えましたが、講師の都合などで果たし得なかったことも多く、残念に思っております。

昭和四十四年度、第一期生にとっては最後の年。ご家庭のご理解、ご協力を得て、さらに思いきった努力を重ねて行きたいと考えております。

虚襟に、いつまでも醜金に。

—『緑萌』第3号—

「一期生と共に」

— 三年間、思い出すままに —

三年担任 出口敏雄

はづべくんば明眼の人をはづべし(正法蔵随聞記一)

教室の窓から、ぬかるみの運動場を隔てて藤原鎌足の古廟、その向うに茨木の街、さらに遙か生駒連峰が眺められます。そうして真新しい白壁の校舎の背後には、今満開の山つつじで彩られた赤松の林がせまり、その中にいつとはなく、踏み固められて出来た小径が続いています。これが四月からの私の新しい職場の環境です。

足かけ二十年にわたる大手前学舎での生活に終止符を打ち、二十名の茨木学舎中学部第一期生と

共により新しい第一歩を踏み出しております。

千余名の高校生に囲まれての生活ですが、これまでの経験を生かして、広く、明かるく、たくましい人間に育て上げたいと願っています。

大手前学舎在勤中寄せられましたご厚情に感謝申し上げますと共に、今後も変らぬご指導ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。

昭和四十二年五月

昭和四十二年四月十二日、入学式

真ッ白い新しい校舎！

茨木学舎中学部第一期生！

広く、明かるく、たくましくをモットーに！

湧き上がる希望、理想に満ち満ちた門出！

けれども、反面、私にとっては重苦しい出発でもありました。式場を蔽う大テントを鈍く鈍くたたきつけていた雨足のように。

二十名の一年生は、決して最初から茨木学舎を志望したのでなく、大半は強引な勧誘の結果でした。しかも、それを受け入れる校舎には、中学部の存在を示す門標もなく、教室内も教壇・黒板すらまだ整わずといった状態でした。

この生徒達と父兄に満足を与える。この学舎に来て本当によかった、といってもらえるようにする。どうすればよいか？ 茨木学舎中学部の将来にも繋がる問題として、一月以来、私の頭を締め付けていたのです。

一月末、茨木に転属を命じられてから約二ヵ月、謙虚に、本当に謙虚に、親しい先輩、同僚、卒業生の意見を伺い、考えをまとめては来ましたが…。

何よりの力づけは「思う存分やりなさい」との学院長のお言葉、それに中学部（大手前学舎）二期生有志数十名による募金でした。テープレコーダー、書架、辞書類などが相次いで届けられ、そしてこれは、山添部長の尽力により、同じく卒業生より教室の絨緞が寄贈されたとき、何とか踏み出したという感慨を抱くことが出来ました。

そんな中で第一回の学級合宿を、学校裏、真龍寺で行いました。真龍寺の紹介、日課の作成資料など、ここでも卒業生およびご父兄の協力をいただいています。

大きな目標をかけた、綿密なプランを立てたつもりでしたが、何ぶん初めて、しかも一人でのこと、実際に行ってみるとやはり欠陥が出て来ます。

例えば食事の時、何でも残さず食べさせようと思っていましたが、生徒は都合のよい言葉を知っ

ています。「アレルギー体質です」といわれて、事前の父兄との連絡不十分を後悔する。といったように…。

学習時間のあり方、もって行き方、そんなことにも気がつかいました。

この年は、夏休みに石清水で。二学期に真龍寺で。と三回、学級合宿を行っています。

小学校ではごく普通のことですが、日々の生活の中でも彼等の中に入りこもうと、教室の後に私の机を持ち込みました。

そうして、昼休みは共に昼食を、放課後は時々絨緞の上に坐り込んで…………。

教室にいたことが大変心苦しい時期もありました。

けれども醤油やソースを借りに来たり、時には私の弁当箱鱈子をねだられたり、塩昆布が返って来たり、という楽しみ。また絨緞の上の座談会では、腰掛けでは到底出来ないような突っ込んだ話まで出て、充実したひと時を過ごしたこともあります。

遠足で学校から池田まで歩いたこと、佐藤先生作「二十一対千三十六」に全員出場、秋の演劇コンクールで最優秀賞をもらったことなど。今はなつかしい思い出としてのみ残っています。

しかし、初年度を顧みたとき、私の態度はまだまだ生半可なものでした。それは新しいこと、変わったことを行うごとに、父兄（経済的なこと）、先生方、特に大手前学舎の先生方に対しての気兼ねが残っていたのです。

夏の臨海、冬のスキー、父兄や他の先生方から適当な候補地まで紹介していただきながら、単独実施に踏み切れなかったのは、スポーツが不得意だということもさりながら、やはり私の気の弱さでした。

高校の先生方が中学生に対して総じて甘い。これは止むを得ないともいえます。高校生と比べて中学一年生は可愛いものです。

しかし、このことと、一方で私になお残る消極性、そんなものが学年の終りの学級内に、私の願いとはうらはらに、ある一つの雰囲気醸し出していました。何か追いつめられたような感じでした。

「あと二年間、黙ってついて来てください」

今、思えば冷汗が出ますが、そんなことをお願いしたのも、この年最後の学級P・T・Aでのことです。まず私自身、もっと強くならねば！もっと強くならねば！と痛感しました。

二十年間、大手前学舎では、かって持つことのなかった鞭を手にするようになったのも、この時からです。生徒達に対してと同時に、私自身に対するものとして…。

それまで積極的な賛成が得られないため逡巡していた修学旅行に代る見学旅行も、意を決してその春から実施に踏み切りました。

ご父兄と交通公社にずい分無理をかけました。

二年目。

私の厄年。全く苦しい年でした。

幕開きはK、Uの転校に始まります。

Kの方はかなり前から予想していましたが、Uについては、理解者の一人と信じていただけに晴天の霹靂でした。二十一名の中から二名の転校生。二度、三度、家庭を訪ね説得を重ねましたが、遂に本意を得ることが出来ず、いさぎよく転出書類を手渡したのは、見学旅行の前々日であったと記憶します。

僅か七人の中から一人の仲間を失った女子、彼女らの動揺と心情が思いやられ、旅行の間中まともにも接することが出来ず、同行していた門川（白木）先生に女子をまかせきりでした。

旅行から帰って新学年。

二人の抜けた穴が教室にポツカリと感じられます。鬱々たる日々が続きます。

何とか薄らいで来た頃、学級内に風邪が蔓延。新一年生歓迎の飯盒炊さんには、肝心の二年生の半分近く休んでしまいました。

学級合宿もお流れ…。

さらに若狭大島での初の単独臨海学舎では、私共の下調査の不十分が一年生のKに大怪我をさせてしまう始末。さんざんでした。

八月に入って、これも初の参禅合宿。

初めての行事のたびに、それを取り上げたことが、本当に良かったのか？という迷いがいつも起きます。

この合宿でも、厳しい生活に悲鳴を上げた生徒達は「何んでこんな所に連れてきたんですか？」「夜逃げしますよ」とか、種々不平、不満を並べ立てました。しかも生徒達のそんな意向に頓着なく、和尚の警策は酷しく背に振りおろされます。「ピシーッ。」「ピシーッ。」私自身が打たれている思いでした。

本当に！良かったのか？……………。

しかし、二日目の午後、私にならって、まずK、女子ではSが、

そして次々と、しかも二度三度、自ら手を合わせ警策を受けはじめたとき、やはり良かったんだ！…胸がジーンと熱くなるのでした。

二日目の夜、そして三日目、私自身平静の中に坐ることができました。

やや平静を得たのも束の間、二学期に入るや、また、また。

まず第一の事件。（これは現在まだ書くことが出来ません）

第二に盗難事件。（ふれたくありません）

さらに初年度来の良き理解者、協力者であった門川先生の辞意、など。

遂にスキー訓練を前にして、胆嚢癒着、続いてヘルペスととり付かれてダウンしてしまいました。

そのような、私にとって暗い日々の中にも、生徒達は成長して行きます。明るいニュースもありました。

まず第一。冬の球技大会で男子サッカーチームが、高校生チーム相手に死闘！三回戦まで進み、特に敢闘賞を受けたこと。

千余名の高校生の中に置かれた一握りの中学生。クラブ活動も一緒、そして体育祭も、球技大会も、高校生の中に混じって玉砕覚悟の出場。そんな中で培われた「たくましさ」の結集です。

第二は大阪府の読書感想文コンクールで、Fの「ビルマの豎琴」が佳作入賞したことです。

読書の奨励は初年度も行いましたが、二年になって、月一冊課題図書を与えるという形で進めました。

「坊ちゃん」「肥後の石工」「ビルマの豎琴」「われらの村がしずむ」「あしながおじさん」「トムソーヤの冒険」「君たちはどう生きるか」……

持て余して、初めを少しだけ読んだだけで、感想文を提出する者もいましたが、F、H、Iをはじめ、読んで楽しく、また、感心させられる文が次第に増えて来るのは喜びでした。

十二月から一・二月にかけて、入試説明のための小学校廻り。これも茨木に来てからの私の仕事の一つです。

授業の合間を見て、二・三十校。

お茶すら出さず、早々に立ち去らざるを得ないときもありますが、時には、私より十年も二十年も経験を経られた校長・教頭から「ご苦労さん」と招き入れられ、入試の話から発展して、公立の現状、体験談、教育観などを伺い、プリントや資料までいただくこともありました。

そんな時には疲れも忘れ、充実感に胸ふくらませながら校門を後にするのでした。

私学という井の中の蛙の私にとって、目を拓けさせてくれる数少ない機会の一つです。

三年目。

暗雲は去り、実行力に富む岩田・公文両先生を加え、中学部の行動が広がります。

日本国宝展、スキタイとシルクロード展、万国博などの見学。ウィーン少年合唱団、イ・ムジチ合奏団鑑賞。三年連続全員による演劇コンクール出場。等々。

生徒達の世界を広げ、より豊かにするために、労を惜しまず出かけました。

夏山登山も良きリーダー岩田先生を得て、はじめて実現可能となりました。

一年生の時、学校から池田までの遠足で、「先生速いなァ、速いなァ」といいながらついて来た生徒たちが、次々と私を追い越して行く、そうして、頂上から引き返して来て私のリュックを持ち、

後を押してくれる。成長したなァ…という思い。しかし、その感慨もつかの間、その時の私は一歩一歩足を進めるのが精一ぱいでした。

二学期からの茶道の実施。

これは一年生のとき「はだしの対話」の取材に来た毎日新聞の記者に書道室で、「中学生はこの部屋使っていないんですか」と尋ねられて以来、私の念願でした。

二年生からの実施は、私の考えていた、道徳の時間隔週ごと実施という程度では効果がないとのことで断念したのです。道徳の時間を全部つぶすまでには、なお思い到りませんでした。

若い、実力のある、男の先生一、卒業生 M 君の骨折りで紹介されたのが、S 先生です。

初めは先生自身も少し戸惑われていたようですし、また生徒達も一部を除いて猫に小判を思わせましたが、後には興味を抱きはじめ、家で道具類を買ってもらう者も出るほど熱が入ってきました。

特に卒業謝恩茶会の前々日、前日は緊張したお点前の練習に時の過ぎるのを忘れるほどでした。

三年間を顧みて、特に！特筆しておきたいことは、学級内の融和を計るために、生徒達がどれほど苦しみ、どれほど努力したかということです。

卒業し、顧みて、初めてそこにあった強い「和」の存在に気づくのであり、そのさ中にいる時は、決してそのようには自認出来ませんでした。

三年間メンバーが変わらない一学年一学級。しかも二十一名という少人数。それなるが故に、「和」を求め、作らんとする努力には並々ならぬものがありました。

四十四年十月十五日の学級日誌抜萃

……男子の一部から女子に対する批判が目立つ。「非協力的である。分裂している」など。

・・・・・・(略)・・・・・・

それぞれのわだかまりがとけはじめるのも、もうすぐだろう……………。(不藤)

男子にもありました。

対立のいらいらを互いに雪合戦で解消させたこともあります。

三時間に互って学級自治会を続けたこともあります。

真剣に考え思うのあまり、男子も、女子も、涙をポロポロ流しながら発言する、答える。そんな光景も一度ならず見られました。

卒業式を前にして、教室の中から、身のまわりから、いろいろな物が次々と姿を消しました。花びん、鏡、愛用の（といえるかどうか）鞭三本、遠足などのとき被っていた帽子など。最後に M から、二十年近くこれは本当に愛用していた水筒をせびられたときは、「あれはあかん」と一旦はことわりしましたが、思いなおして与えることにしました。

ところが、「ちょっとした損害、また新しいのを買わねば」、と思っていた矢先、卒業式後の茶話

会で女子一同からの財布とともに、学級一同ということで、新しい水筒のプレゼントを受けました。

正直に言って、Mだけに与えることにいくらか逡巡する気持ちがありました。しかしそれは、全くの杞憂でした。

私にとっては新しい（元のより立派な）水筒以上に、彼等のその気持が大きなプレゼントでした。

二十一名の一期生諸君、本当によくやって来たね。

（ただし勉強は……）

ご父兄の方々、ご協力本当に有難うございました。

それから三年間、陰に陽にご支援いただきました卒業生、先生方、有難うございました。

卒業式の日、夕日の中で父母の墓前に線香を手向けながら、式の最中はこらえきれた涙があふれ出るのです。

三年間を顧みたとき悔も残ります。

特に思うのは、もっとゆとりをもって、彼らと接したかったという願いです。

しかし、この三年間は、私にとって過去のどの三年間よりも、充実した、そうして学ぶこと多い三年間でした。

生徒達とともに進みながら、私自身、広くたくましくなりました。

三年前、まわりを気にし、新しい行事の度ごとに逡巡していた私。

でも最近はもうあまり気にしなくなりました。

正法眼蔵随聞記は巻頭から私に語りかけます。

はづべくんば明眼の人をはづべし と。

II. 一期生、21名が卒業… (一『緑萌』第3号一)

「答 辞」

日本万国博の開会式というよき日、ここに私達二十一名の卒業式挙げていただきましたことを、まず心から御礼申し上げます。

私たち茨木学舎中学部第一期生は、わずか二十一名という、特殊な環境のもとに、多くの経験と変化に満ちた三年間を過ごしてまいりました。將軍山が一目で見え、冬でも日光のよく当たる小さな教室に、緑色のじゅうたんを敷いてもらい、素足で生活してきた三年間。高校生千人余の中に、中学生がたった二十一人であるが故に、特別扱いされ、みじめな思いをしたこともしばしばありました。高校生の付録のようにひっついて、昨年全学年がそろうまで独立しなかった自治会、総会や役員立候補演説のたびに、運動場で石ころをいじりながらすわっていた2時間は、たいへん長く感じられたものでした。それにクラブ活動も、高校生の中に混じって行かない、体育祭、文化祭においても、中学生の存在というものは、本当にちっぽけなものでしかありませんでした。しかし、そんな中で、私たちはテントの中で多くの高校生に混じりながらも、希望に夢をふくらませた入学式の日を忘れず、二十一人が手をつなぎ合い、中学部の基礎作りをめざして、努力を続けてきました。そして三年、中学生も七十五名とふえ、念願の自治会も昨年、独立の目的を達成し、会則も私たちの手づくりあげました。

しかし、少人数のために、他の学校ではとうていできない数多くの経験をさせていただいたことは、私たちにとって、たいへん貴重なものであり、生涯心に残るものと思います。中1の時から数回行われた合宿、中でも中2の夏休みに行った坐禅合宿の一泊目の夜などは、本当に逃げ出そうかと思つたほどつらく、今でも生々しい思い出として胸にやきついています。それから夏山登山。重いリュックを背おい、キャラバンをはき、アイゼンをつけ、一步、一步踏みしめて登った。白馬の大雪山溪や、夜の伊吹山は私たちに深い大自然の感動を与えてくれました。これからも、苦しいこと、悲しいことにぶつかった時には、坐禅や登山を思い出し、歯をくいしばって耐え、強い人間に成長したいと思います。また、毎年おこなわれる演劇コンクールには全員参加して、特に最優秀賞を獲得した「二十一対千三十六」の劇は私たちにとって、忘れられないものとして、心に残っています。あの受賞の感激は、これからもずっと、心の中に生き続けていくことでしょう。その他イ・ムジチ合奏団、ウィーン少年合唱団の公演など数多くの芸術鑑賞をさせていただき、その度に新しい感激につつまれたものでした。これらの生の体験は、将来、心のささえとなり、きっと役立つくれることだろうと思います。わたしたちにこんな多くの計画を立て実行して下さいました出口先生をはじめ、御父兄の方々に、厚く御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。中学生ということでかわいがってもらい、わがままばかりいつてきたことをお許し下さい。追手門学

院中学部茨木学舎第一期生の自覚と責任を改めて意識し、これからの荒海に、力強く船出いたします。この三年間、茨木学舎で学んだ深い友情をもって、より広い人間を目指して、一生懸命努力いたします。

それから、先ほどは在校生の皆様より、やさしい御心のこもったお祝いのことばを、ありがとうございました。短い期間ではありましたが、楽しくすごした日々をなつかしむとともに、皆様方のできるだけからの発展を、心からお祈り申し上げます。

おわりに、お世話になりました先生方、どうぞお体御大切に。いつまでもよい先生でいてくださいますよう。先生方の御幸福と、母校の発展を心からお祈り申し上げ、本日の卒業式のお礼のことばとさせていただきます。

昭和四十五年三月十四日

追手門学院中学部茨木学舎

第一期生総代

樋口 洋子

Ⅲ. 毎号の「編集後記」を担当された編集子 (D)

—「第1号」(1968.4.30)—

文字通りの萌芽。やっと発行にこぎつける。

行事の度毎に、感想文を書かせて来ましたが、それでも、球技大会、耐寒マラソン等の記事がもれていますし、何より残念なことは課題の読書感想文を収録し得なかったことです。

発行日も、終業式の予定がついに一ヶ月のびてしまいました。こうとわかっておれば、春の見学旅行記事も載せることが出来たのですが……………。

二十名の新一年生が入って、来年はこの緑萌がよりたくましく成長し、まといつく茨の枝を押しつけてくれることを期待しています。 (D)

—「第2号」(1969.5.30)—

將軍山を彩るツツジもはや散り染めようとしている。

今年こそはと思っていたのが、やはり印刷所の事情その他で発行が遅れてしまった。

短い春休みを原稿の選択・書き写しなどにつぶされる。でも楽しい仕事です。

莫大な原稿の中からあれもこれもと思った結果が百三十頁。今年もまた赤字。

それでも 行事の感想文など 重点的にしぼったのをはじめ、学級日誌の私共の寸評・感想も涙をのんで割愛…。かなり削ったのですが…。

参禅合宿の感想文中、S君とSさんの文が雑誌「禅」12号に掲載されています。私の手元に入るのが遅くこの「緑萌」に再録できなかつたのが残念です。

多忙な中を玉稿をいただきました学院長先生、部長先生、ならびに御父兄のかたがた、および昨年同よう全作品の提供をいただきました国語科神楽岡・石川両先生に厚く御礼申し上げます。

初年度 次年度 共に二十名が、本年度やっと三十台に…。緑萌よすすく伸びよ！たくましく！
(D)

—「第3号」(1970.6.30)—

七月の声を聞き、期末考査のあわただしさのなかで、扇子片手に校正、いうはめになってしまいました。

例によって、莫大な原稿の中からの選択に多大の時間を費やしました。いくら赤字覚悟とはいえ、限度がありますので…。

第一回の卒業生を送り出し、本年度は第四年目、生徒数も九十六名に。
じっくり振り返って、更に大きな飛躍を…。

今年はやはり仕事に忙殺されそうです。(D)

—「4号」(1971.7.20)—

毎年もっと早くと思うのですが、遂に、七月発行が恒例化してしまったようです。

本号では、行事の記録は重点的にしぼり、学級日誌にかなりのスペースをさきました。それでも、一年分の何分の一にしか過ぎないのですが…。

学級日誌は、各学年、それぞれ特色をだし、例えば一年生の日誌では、マンガ、絵、カラー頁、その他こった部分があるなどですが、再録できず、残念です。

生徒数も、本年度やっと百名の大台、少人数の頃の特徴を失わず、しかもより一層充実して行きたいと願っております。 (D)

—「第5号」(1972.7.20)—

「われら二十一人」からスタートしたこの「緑萌」も、本号で「われら117人」となりました。

生徒数が増加していくことは、この上なき喜びですが、この冊子の編集という立場から見ると全く編集者泣かせです。

莫大な量の原稿、一人一編は必ず という大原則。しかも単なる文集ではなく、茨木学舎中学校として何かある柱を通したい、いくつかのポイントを浮かび上がらせたい、そんなことを考えながらわれわれ担任三名、原稿をとりあげ、また元に戻し、再びとりあげ…というようなことを何回か繰り返します。

しかし結果は、経費面でも大きな制約をうけるため、捨てざるに惜しい 数多くの原稿を没にし、このような総花的な、やはり文集となってしまいます。

しかたがないというより、やはり これでよいのかも知れませんが……。

本号から 一年の回顧の欄に「社会の出来事」をつけ加えました。意図は説明するまでもないと思います。

第一号から 設けるべきであったと思います。

ご多忙のため 学院長先生、校長先生、それに岩田先生の原稿をついにいただくことができませんでした。本当に残念です。

代わって 佐伯先生より原稿がいただきました。先生には毎年三年生が道德の時間に茶道を教えていただいています。

お忙しい中を 本当にありがとうございました。

私達の中学校も 本年6年目。

私自身、ともすれば惰性で動き、マンネリ化しがちの昨今ですが、(生徒称するところの) シルバー・バトンをわが身に加え、更に新鮮な意欲をかきたてていきたいと思っております。 (D)

—「第6号」(1973.7.20)—

光化学スモッグ注意報の発令を示す黄色のふき流しが、連日校庭にひるがえる、という大変な時代になったものです。

この現代の教育は……、などと考えながらこの後記を書いています。

今年担当がないからこの「緑萌」の発行もせめて六月中にと考えていたのが、やはり例年のごとく遅れてしまいました。いろんな原因がありますが、私自身についていますと「今年は時間的余裕があるから…」という油断が大きいようです。

やはり人間は忙しい時ほどその気になって仕事に熱心に取組むし、仕事もかえってはおどろくようです。

例によって国語科や担任の先生方から提出された作品を、更に私の手で大幅にカットしたつもりが、校正刷りを見れば168頁、又々赤字に悩まされることになりました。

作品点数としては、減らしたはずなのが、頁数において増加ということになったのは、先生方の原稿もさることながら、生徒諸君の作品がやはり一編一編長くなっていることが影響しています。

しかもこれまでに比べてすらすら読める文章が多くなったように思われます。

感想文・作文を書かせすぎたせいかも知れません。

三年生の学習日誌が一冊(五月頃から一月頃までの分)行方不明、従って中途半端な選択に終わってしまいました。

四期生諸君 もし出て来たら 届けて下さい。君たちの大切な記録なのだから……。

時間的余裕がなく、十分な校正が出来ませんでした。お見苦しい点があると思います。おゆるし願います。(D)

一「第7号」(1974.8.20)一

この3月、私は大阪府私学のヨーロッパ教育事情視察団の一員として、約1ヵ月、東欧圏も含めた11ヵ国を訪ねてきました。その印象の一コマ一コマが、いまだに脳裏に焼きついています。そうして、四十数年の人生、二十数年の教員生活を通して養ってきた、人生として、あるいは、教師としての私の見方、考え方、知識がいかに日本的な狭いものであったかを通観しました。

もちろん、日本(人)の良さを認めないわけではありません。しかし、さらに、もっともっと、広い見地・視野から勉強し、努力して行かねばならない。そんなあせりと希望が、私の心の中に渦巻いているのです。

海外ボケというものがあるそうです。1ヵ月程、そのような状態から、取りかかりが遅れたところへ、何やかやとその他の事情が重なって、この「緑萌」の発行が、すっかり遅れてしまいました。

例年、遅くとも一学期終業式には、できあがっていたものが、今回は、夏休み、立秋も過ぎ、残暑の中で校正という始末です。全く申しわけないと思います。

昨年末の石油危機以来の狂乱物価高騰、例年赤字に悩んできましたこの「緑萌」発行も、もろにその影響を受けることになりました。昨年より三割高との印刷所の話を聞いて、謄写印刷、タイプ印刷等とも考えましたが、とりあえず、本号については、従来通りの活版印刷にふみきました。

そのため、減頁を余儀なくされました。1・2年生は、各人一編ずつ、三年生は、卒業感想文に加えて全体で数編、と制限しました。学級日誌抄も、各学年のいろんな事情と併せて、本号では、姿を消しています。特色のうすれた七号となってしまいました。

学校長はじめ、担任の先生方の原稿が一編もなし。これは創刊以来はじめてのことです。はからずも減頁に協力いただいた形となりましたが、本当に淋しい限りです。

第八号、第九号……今後ますます発行しにくい事情が増して行くことと思います。しかし、生徒たちのあゆみの足跡を、確実に残しておくために、発行は続けて行きたいと考えています。

ご支援をお願いします。(D)

—「第8号」(1975.8.20)—

ツクツクホーシの泣き声が盛んに聞こえます。

例年、1学期中に生徒たちの手で校正、そして発行をと考えているのですが、今年もまた、残暑の中で、校正刷りを前に、一人赤鉛筆を手にするはめとなりました。

やっと、発行にこぎつけた！そんな感じです。

担任の先生方からの生徒原稿の提出が遅れたこと。印刷所の仕事の予想外の大遅延…。

しかし、私自身、やはりもっと早くとりかかるべきでした。

第八号を編集しながら、これまでの各号と比べてみるのですが、何か本号に物足らなさを感じます。経費の関係から、本号も、1・2年は1人各1篇、3年生は卒業感想文に加えて、全体として十数篇と限ったことも、もちろんその原因になっています。

しかしそれだけではない。何故だろう？

その原因をあれこれと考えてみるのです。

生徒諸君の作文能力の低下(小学校以来の指導が当然からんでいます)、それもあります。

しかし、より本質的なものとしては、本中学部の特色がやや薄れかかっているからではないかと、ふと考えるのです…。

私事にわたって恐縮ですが、第1号以来(第3号まで佐藤先生)掲載が続いていた文化際・コンクール上演の演劇脚本が、本号では出ていません。

昨年来、どうもさえず、中途半端な作品しか書けなかったからです。申しわけありません。(それまでの作品が問題なしと自惚れているわけでは、もちろんありません。

その代わり、昨年3～4月にかけてのヨーロッパ旅行の印象記を、拙文を省みず出ささせていただきました。文章の統一がとれていないのは、その半分が、折にふれてノートに書き残して来たものだからです。

第九号、第十号…より充実した「緑萌」が発行出来るようでありたいと念じます。 (D)

Ⅲ. 一「第9号」(1976.7.20) 一茨木学舎最後の出口敏雄先生 (大手前学舎へ異動)

「緑 萌」雑 感 (1967.4 — 1976.3 追手門学院中学校茨木学舎)

一編集後記にかえて一

一期生が入学して間もなく実施した学級合宿の感想文集「第1回合宿を終えて」を、私自身の手で、ガリ版印刷をしたとき「先生、大変でしょう。これからは印刷屋にさせて下さいよ。そんなための費用なら、私たちいくらでも惜しみませんから。」とのご父兄方のお言葉に甘えて、その年度の終わりに出したのが『緑萌』第一号です。

爾来、本号で第九号。

今回、巻末「九年間の記録」(本来第十号に予定していたものです)をまとめるために、第一号から見なおしてみました。

第一号は、私にとって、ほとんど初めてとってよい編集の仕事でしたので、今見直してみますと、不備な点にあちこち気づきます。

しかし、行事の感想・記録文、作文抄等につけ加えて、学級日記の抜萃、PTA 投稿室が目につきます。

PTA 投稿室は第三号まで。そして、学級日誌の抜萃は第七号で姿を消しています。従って、ここ数号の『緑萌』は、感想・記録文集といった感を呈しています。

経費面からくる紙数制限もあって、止むを得ない面もありましたが、当初の編集の意図がかなり薄められてきている感じで、考え込まされました。

感想文、そのものも、何かユニークな文が少なくなってきたと感じましたが、それはあながち、私の懐古感からだけではないと思います。理由の一つとして、やはり、私たちの作文指導の不十分さがあげられると思います。感想文を書かせるだけに終わってしまっていることが多いのではないのでしょうか？

当初は、よく、良い文を教室で読み上げたり、掲示したり、あるいは、読書感想文の入賞作品集を書架に置いたりしたことを思い出します。

ただ、書かせるだけに終わってしまっていては不十分。

それに、ずっと続けてきた音楽鑑賞や、美術鑑賞と同じように、優れた作品に直接生徒達を接しさせることが、この場合についてもやはり必要なことではないでしょうか？

そんなことを感じました。

感想文も含めて、行事その他の意義をこの際もう一度、原点に帰って見なおし、考えなおす必要がありましょう。



大手前学舎に移って三ヶ月余、…昼間は仕事に追いまわされ、この『緑萌九号』の編集・校正の仕事は、専ら夜の作業となりました。校正、第一校、第二校とも、連夜 12 時という状態でした。

こんなとき、以前ならば、よく「自分は何のために、…」とか「自分だけ、何故…」とか、一人グチめいたことをつぶやくのでした。

しかし、最近は何というか「なんとかやり終えた。自分はまだ元気だな、……生きているな、……」という、安堵感・充実感を感じるようになりました。歳五十近くしてやっと得た心境です。



編集・校正を通して、生徒たちの作文を読んでいると、ふと、まだ、茨木学舎にいる錯覚にとらわれます。

「うーん、こんなことを考えていたのか、…」

「うーん、わかってないなァ」

「この文章うまいなァ、明日でもほめてやらなきゃァ…」

等々と考えて、……現実に引きもどされる。

そんなことが、一・二度ならずありました。

九年間の習性 恐ろしいものです。



茨木学舎の九年。

それは、私に、本当に貴重な体験を種々許し、与えてくれました。

苦しかったこと、楽しかったこと。……

遠足、登山、スキー、体育祭、臨海、合宿、音楽鑑賞、美術鑑賞、茶道、演劇、図書室そして等々。

それらは私の視野と経験を大きく広げてくれました。

身体と神経を強靱にしてくれました。

そして、人間をより深く見る眼を育ててくれました。

この貴重な体験を生かして、更に更に、広く、たくましく、そして、深く、自分自身を伸ばして行く努力を続けて行きたい。

そんなことを考える昨今です。

最後に、この「緑萌」毎号の赤字経費の解消に全くの匿名でご協力いただきました方々に厚く厚く、お礼申し上げたいと思います。

本当に、有難うございました。

茨木学舎。

生徒諸君。

そして、この「緑萌」が、更に更に、緑の芽をのばし、育ってくれることを心より祈ります。

「緑萌」よ、さようなら！

出口敏雄
(1976.7.12)

IV. 演劇活動

「二十一対千三十六」

・・・・・・(「脚本」佐藤良和教諭作－略－)・・・・・・

この作品は昨年十月高槻市民会館での文化祭、及び11月浪花女子学園講堂で行なわれた第40回大阪府中学生演劇祭に中学部全員により上演されたものです。

学級全員による出演は演劇祭でも画期的なこととして、そのアンサンブルとヨーロッパ的に洗練された脚本の良さ故を以って、最優秀大阪府知事賞の荣誉に輝きました。

登場人物はすべて実名となっていますが、役の彼等は勿論現実の彼等ではありません。

練習の課程で恥かしさを放擲し、「自分以外の自分」の役作りに取り組むことにより、平素の教科の授業では到底得ることの出来ない、人間の心の勉強を、大なり小なり、無意識の中に感得してくれたことと思います。

今回の出演は、大多数の生徒にとり、恐らく一生に一度のこととなるものと思いますが、ものを創り上げる喜びと共に、貴重な体験として、彼等の将来に生きてくれることでしょう。

私達がこの劇を作り上げた、今一つの目的、それは申上げるまでもなくおわかりいただけることと思います。

交通事故に代表される人間軽視の風潮、受験競争があふる人間疎外感、マスコミを通して流れ来る頹廢的な文化は生徒達を毒して、私達の学級づくり、学校づくりを年々困難に向わせています。

今回の劇作り、上演を通して私達はそれを一歩でも高め得たいと思って来ました。しかし、現在のところその効果は、これを上演した学級の中ですら、目に見えて現れて来ているとはいえないようです。自治会のたびに、同じ問題を何回か繰返し討議し続けているといった状態です。

しかし私の耳には 今尚

続けます。信じて下さい。

続けます。信じて下さい。

続けます。信じて下さい。

の叫びが消え失せずに残っています。

きっと いつかは 飛躍的な目覚めをもたらしてくれるものと信じています。

(出口 記)

—「第1号」(1968.4.30)—

第54回 大阪府中学生演劇祭 上演脚本 (佳作賞)

マサユキの道 —まく—

出口敏雄

あとがき

「素材の整理がまずく 構成に問題がある」

「エポックメイキングな所がない」

「主人公のマサユキにたよりすぎる。友人が弱い」

「ことばや動作の中にイギリスの生活が出てこなくなつては……英語だつてもっと飛び出すはずだ」
等々。

大阪学校劇作研究同人会のメンバーの先生方から きびしい批評をいただいた作品で 私としては 載せるに躊躇を感じる作品なのですが 茨木学舎での最後の作品となりました それに 特活演劇クラブの生徒たちからの強い希望もあって 紙面を汚すこととしました。

いずれ 同じ素材を 再び稿を改めとり上げたいと考えています。 (出口敏雄)

V. 茨木学舎ならではの「本物にふれる」多彩な行事—「手づくり」教育の源流

—『緑萌』第9号(掲載)—

附 中学校茨木学舎 九年の記録 (記載事項)

- 一、生徒名簿(担任) 1期生～9期生
- 二、学校自治会役員(42・43年度～50年度)
- 三、P・T・A役員
- 四、主な実施行事
- 五、受賞

－ 主な実施行事 －

○ 遠足

42.11	学校－泉原－勝尾寺－池田
43.6	高槻市成合 飯盒炊さん
44.6	東六甲縦走 芦屋川－ロックガーデン－山頂－宝塚
11	中山寺－中山連峯－多田神社
45.2	(耐寒) 西六甲布引－ツウエンティクロス－柚谷－六甲
6	学校－泉原－勝尾寺－箕面 (雨中決行)
11	京津線四ノ宮－牛滝山－石山寺
46.6	大山崎－天王山－柳谷観音－東向日町
11	国鉄武田尾－能勢電山下
47.1	(耐寒) 西六甲
6	東六甲縦走 (降雨のため山頂よりケーブル下山)
11	中山寺－中山連峯－多田神社
48.6	学校－泉原－勝尾寺－池田
11	京津線四宮－牛滝山－石山寺
49.1	(耐寒) 西六甲
6	大山崎－天王山－柳谷観音－東向日町
11	国鉄武田尾－能勢電山下
50.6	東六甲縦走
11	中山寺－中山連峯－多田神社 (降雨のため満願寺より下山)
51.2	(耐寒) 西六甲

○ 臨海訓練

42.7	和歌山県 白浜 (大手前学舎と合同)
43.7～50.7 (毎年度実施)	福井県大飯郡大飯町大島 民宿

大島中学校からの便り ―『緑萌』第8号― (抜粋)

夏の臨海訓練のとき、校庭を借りるなどお世話になっている大島小中学校に対して、毎年、私たち一冊ずつ持ち寄った図書の寄贈を行っていますが、その礼状が左の通り寄せられました。

謹啓 秋冷日増しに加わり、朝夕しのぎ易くなりました。

貴校職員ご一同様、生徒諸君いよいよ職務および学業に精励のこととお慶び申し上げます。

つきましては、過日は生徒諸君から、本校児童生徒に対し心暖まる贈物の図書多数お届け下さいまして誠に有難く厚くお礼申し上げます。

早速児童・生徒に朝会を通じて披露し、図書館に備えつけ、貴校の皆さまの誠意に報いるよう読書指導をいたしたく考えております。

毎年のことながら貴校のご厚志ただただ感謝のみでございます。

原電開発と道路の開通は、平和であったこの大島を今後大きく変えていくものと思います。しかし美しい水と空気はまだまだ保てるものと思います。 … 略 …

敬具

昭和 49 年 9 月 19 日

福井県大飯郡大飯町大島

大島小中学校長 杉吉道 重 藤

追手門学院中学部長殿

.

拝啓

すすきの穂が風になびき、朝夕涼しくなってしのぎやすくなりました。

追手門学院中学部の皆さまお元気で勉学に励まれていますか。

大島の方は、稲のとり入れも、すっかり終わり、野山は秋の色が濃くなってきました。

皆さんが、毎年臨海学校にこられて、親しまれた島の定期船もこの九月で廃止になり、代わりにバスが通うことになりました。

来年皆さんがこられるときは、そのままバスで乗り入れることになるでしょう。

… 略 …

私たちの住む大島も大きく変わろうとしています、水と空気はきれいです。

来年もまたお越し下さって、楽しい夏を過ごして下さい。

とりあえず全校を代表して、お礼申し上げます。

皆さんも、ますます元気で、勉強して下さい。

さようなら

9 月 18 日

大島小中学校 生徒会代表 井本 治一

追手門学院中学部の皆さまへ

* * * * *

○ スキー訓練

42.12	新潟県 関温泉（大手前学舎と合同）
43.12	長野県 発哺温泉（高校と合同）
44.12～49.12（50.12 中止）	群馬県 草津温泉

○ 夏山登山

44.7～50.7 (毎年度実施)	伊吹山夜間登山
	白馬岳登山

○ 見学旅行

43.4	佐久間ダム－浜松 (日本楽器他)－三保－日本平－登呂
44.4	秋芳洞－宮島－広島 (東洋工業・原爆資料館)－倉敷 (大原美術館他)
45.4	水戸－日立 (日立製作所)－東海村 (原研)－水郷－銚子－佐原
46.4	秋芳洞－宮島－広島－倉敷
47.4	能登－五箇山 (岩瀬家)－高山 (飛騨民族村・屋台会館他)
48.4	秋芳洞－宮島－広島－倉敷
49.4	能登－金沢－富山－高山
50.3	秋芳洞－宮島－広島－倉敷
51.4	能登－富山－高山

○ 学級合宿 (○内数字は期生を示す)

42.5	① 真龍寺 (学習)
8	① 石清水八幡宮 (学習)
10	① 真龍寺 (学習)
43.5	② 箕面青少年の家 (学習)
8	① 宇治黄檗山潮音精舎 (坐禅)
	② 箕面勝尾寺 (学習)
10	① 真龍寺 (学習)
44.8	② 宇治黄檗山潮音精舎 (坐禅)
	③ 高野山赤松院 (学習)
11	② 真龍寺 (学習)
	① 池田高法寺
45.8	③ 高野山赤松院 (学習)
	④ 宇治黄檗山潮音精舎
46.5	⑤ 真龍寺 (学習)
8	③④⑤ 高野山 東光院・宝善院・赤松院
10	④ 真龍寺 (学習)
	⑤ 真龍寺 (学習)
47.8	⑤④ 宇治黄檗山青少年研修道場 (坐禅)
11	⑤ 真龍寺 (学習)
48.5	⑥ 宇治黄檗山青少年文化研修道場 (坐禅)

8	⑥⑦ 高野山東光院・赤松院（学習）
11	⑤ 真龍寺（学習）
49.5	⑧ 真龍寺（学習）
8	⑥⑦ 高野山 東光院・赤松院（学習）
50.8	⑧ 宇治黄檗山青少年研修（坐禅）

○ 音楽鑑賞

44.4	ウィーン少年合唱団
11	イ・ムジチ合奏団
45.7	レニングラード・フィルハーモニー
46.5	レニングラード・バレエ
47.11	ザルツブルグ・モーツァルテウム
48.10	ドレスデン国立歌劇場管弦楽団
49.9	ニューヨーク・フィル交響楽団
50.5	国立ロシア合唱団

○ 美術展等見学・芸術鑑賞（全学年実施分）

43.3	映画「黒部の太陽」
5	前進座「佐倉義民伝」
44.5	日本国宝展
6	スキタイとシルクロード展
45.3	日本万国博
5	日本万国博
10	ミレー展
45.11	劇団四季「なよたけ」
46.7	講演「エベレスト登頂談」松浦輝夫さん（植村直己のパートナー）
47.3	ゴヤ展
10	メトロポリタン美術展
12	映画「モダンタイムス」
48.5	映画「戦場にかける橋」
49.7	中華人民共和国展覧会
51.3	韓国五千年美術展

○ 受賞 演劇「大阪府中学生演劇祭」

42.11	最優秀 大阪府知事賞 「二十一対千三十六」*
43.11	佳良賞 「小さい秋」*

44.11	優秀 毎日新聞社賞 「青空に…蹴ッ飛ばせ!!」 *
45.11	優秀 毎日新聞社賞 「祭り囃子のひびく頃」
46.11	佳良賞 「宿題ひきうけ協会顛末録」
47.11	佳良賞 「殉教」
48.11	最優秀 大阪府知事賞 「黄色い国」
49.6	佳良賞 「顔」 (課題創作)
50.6	佳良賞 「音」 (課題創作)
50.11	佳良賞 「マサユキの道」

(* 脚本 佐藤良和教諭作)

○ 追記

1期生以来しばらくは、卒業式のあとホテルに移動し、保護者を交えての「謝恩会」が、「テーブルマナー」の実習(行事とはせず、先生方の申し合わせで実施)も兼ねて催された。

epilogue - 「創設一年」 部長 山添正男 / …… 茨木学舎への「置き土産」

…(略)… 四百余名の新入生の中に20名の可愛らしい中学生が右端に一列に着席しておりました。

私はこれ等の者が茨木学舎における将来中高一貫の六年制学部第一期生として基礎をなすものだから数は少ないが教育全般に亘って取扱わねばならぬと決心致しました。入試における成績は、上、下の差が甚だしくいわゆる玉石混淆でありましたが、…(略)… 担任を出口教諭に、諸先生にもご協力をお願いし立派な模範的中学にしなければと決心すると共に、中学部の創設の喜びを身をもってしみじみと感じました。一年過ぎた現在、最初の決心どおりに実施されたかどうか…以下、略

(『緑萌』第一号)

* * * * *

出口敏雄先生、茨木学舎、そして「緑萌」との惜別…

…(略)… 茨木学舎の九年。

それは、私に、本当に貴重な体験を種々許し、与えてくれました。

苦しかったこと、楽しかったこと…

遠足、登山、スキー、体育祭、臨海、合宿、音楽鑑賞、美術鑑賞、茶道、演劇、図書室等々。

それらは私の視野と経験を大きく広げてくれました。

身体と神経を強靱にしてくれました。

そして、人間をより深く見る眼を育ててくれました。

この貴重な経験を生かして、更に更に、広く、たくましく、そして、深く、自分自身を伸ばして行く努力を続けて行きたい。

そんなことを考える昨今です。

…以下、略

出口敏雄先生 追手門学院における「年譜」

『出口敏雄先生』伝

理事長(兼任/選任)	学院長	学舎(茨・木)	校長(学部長)	高等学部部長	職名(担任等)	教科	学務(統務分掌)	その他(委員会)	クラブ顧問	備考
昭和22年	八東周吉/2.10~	八東周吉	森足(兼八東周吉)							(中学校 設置)
昭和23年	八東周吉									
昭和24年										
昭和25年				創設/吉田千代巻						
昭和26年										
昭和27年										
昭和28年		中学部	亀井彦一		中2・3年(副)	中理科	庶務			
昭和29年					中教諭・二(副)	中理一・二三	庶務			
昭和30年					中教諭(特外)	中理一・二三	研究・放送			
昭和31年					中2・3(副)	中理科三・二	統務部			
昭和32年						理科	統務・放送			
昭和33年					中2(副)	理科	統務部・放送部			
昭和34年					中1・2(担)	中理科	統務部・生活指導	組合委員長(親睦)		
昭和35年					中1(副)	中理科/18,技術/2	統務部・放送		科学部	
昭和36年		/~3.31		寺田新一	中1・4(担)	理科	研究・自治会		科学部	
昭和37年		1.30~/上田高等学院長事務取扱			中2・4(担)	理科・技術	図書・自治会指導		科学部・飼育部芸部	
昭和38年		上田高等学院長事務取扱			内田正己	理科	庶務・自治会指導	組合委員長	科学部	
昭和39年		"/天野利武/10.16~			2年(副)	理科(高兼)	庶務・自治会指導・庶務	組合委員長	科学・演劇	
昭和40年		天野利武			中3・4(担)	理科	自治会指導・庶務	食堂委員長	科学・演劇・飼育	
昭和41年					2年(副)	理科(物理・地学)	*学務部・総務	食堂委員長	科学・演劇	昭和41年~/佐藤・高伏へ
昭和42年					中1(担)	物(中6,高15)・技術	中学総務・統務	PTA副書記	演劇	
昭和43年					中2(担)/中主	物(中9,高10)	中学主任・統務		演劇	
昭和44年					中3(担)/中主	理(物)(中10,高9)	中学主任・統務		放送部	
昭和45年					中主/中1(担)	(中7,高9)・道徳特活2	自治会指導・庶務		中サッカ-	
昭和46年					中主/中2(担)	理(物)(中11,高7)・道徳特1	自治会指導・庶務		放送部	
昭和47年					中主/中3(担)	理(物)(中11,高7)	同和		放送部	
昭和48年					中学主任	理(物)(中8,高10)			演劇部・放送部	
昭和49年					中学主任	理(物)(中13,高4)	*図書・同和	教育研究所(教育研究所)	放送部	
昭和50年					中学主任	理(物)(中8,中特2,高6,HR1)	*図書		放送部	
昭和51年					中1・1(担)	技術・理(中4,中技2,HR6)*	*総務・自治会		演劇クラブ	
昭和52年					中2・2(担)	技術(中技2),高(12),HR1	*総務・自治会指導		演劇クラブ	
昭和53年					中学3年主任	技術12	*自治会・総務		演劇クラブ	
昭和54年					中2(副)	技術(技8)	*自治会・総務		演劇	
昭和55年					中学3年主任	技術(技2)	*生活指導	食堂委員・教職員研修部(教育研究所)	演劇	
昭和56年					中学2年主任	技術(技2)	*生活指導	学校創立50周年記念事業実行委員会・運動委員会	演劇	
昭和57年					教諭	技術(技6)	*生活指導		演劇	
昭和58年					教諭	技術(0)			演劇	
昭和59年					校長事務取扱職	技術	(校長職全般・教頭職)	評議員・食堂委員	演劇	
昭和60年					出口敏雄(仮)	校長	校長職全般	評議員・食堂委員	演劇	
昭和61年					出口敏雄	校長	校長職全般	理事	演劇	
昭和62年						校長	校長職全般	理事	演劇	
昭和63年						校長	校長職全般	理事	演劇	
平成元年						校長	校長職全般	理事	演劇	
平成2(1990)年						校長	校長職全般	理事	演劇	(校長)山本治之/兼任

執筆要項

1. 原稿の構成

- 1) 掲載形態は①特集論文②自由論文の、①②いずれかであること
- 2) タイトルは日本語のみの表記とする（要約は不要）
- 3) 所属名
学校名または学部・学科または所属課・事務室、職名（教員の場合）、執筆者名
- 4) 本文・注・文献（仕上がりは B5 判）
400 字詰め原稿用紙 35 枚程度
（1 ページ 43 字× 33 行 = 1,419 字、表題等のスペース（9 行分）も含め、原則として 10 ページ以内。
図表等で 10 ページを超える場合は事前に相談。）
文中表記について、句読点の仕上がりは「、」「。」とする。
注釈の形式は、脚注・文末いずれも可。他に基準は設けない。
参考文献の記載は、文末のみ可。他に基準は設けない。
- 5) 図表、写真の使用について
原則として版下図を提出すること
他からの引用については、必ず執筆者が許諾手続きをとること

2. 連絡先：追手門学院一貫連携教育研究所

- 1) デジタル原稿の場合、電子メール（添付ファイル形式）、CD または、FD（フロッピーディスク）
- 2) プリントアウトしたものを 1 部（A4 判）提出する
- 3) CD、FD（フロッピーディスク）は原則として返却しない

3. 原稿の校正

- 1) 原稿の校正は 2 回までとする
- 2) 校正時の執筆者による大幅な加筆・修正は認めない

4. その他

著作権は追手門学院に帰属し、刊行後本学ホームページ上で公開します

追手門学院大学一貫連携教育研究所紀要 第 3 号

2017 年 3 月 31 日発行

発行者：追手門学院大学 一貫連携教育研究所
〒 567-8502 茨木市西安威 2 丁目 1 番 15 号
TEL：072-641-9659

印刷所：川西軽印刷株式会社
〒 540-0005 大阪市中央区上町 A 番 22 号
TEL：06-6761-5768
